

「環境」とは何か

西 谷 弘

はじめに

今日、「環境」という言葉が学術・行政・マスコミといった多角的なレヴェルでクロースアップされるようになったのは、一九六〇年代の高度経済成長以降の環境問題（環境破壊、環境汚染）の発生が直接的な契機であると考えられる。

しかし、その言葉の意味はそれぞれ異なった規定、もしくは一定共通認識をもたずに使われているのが現状である。更に、徴視的にとらえるならば学術レヴェルでの「環境」も法学、生物学、経済学、社会学とそれぞれ独自な見解を示しており、その概念規定は不明瞭であると言わざるをえない。

元来、「環境」という言葉は『元史』の「余門伝」にあるところの「環境作堡砦、選精甲、外扞而耕稼祁其中」という文章の中からとり出されたもので、いうところは四囲の境界

としてのフィジカルな外界を指している。また、この漢語の「環境」が西欧の「Milieu」の訳語として移しかえられたわけだが、この「Milieu」意の意味はA・コントによると「人間有機体ならびにその社会的組織体に対して外から影響を及ぼすところの一切の力の総称」⁽¹⁾であり、すでにこの時点で意味のちがいがあつたことを認識しなければならぬ。⁽²⁾

また、現在我々が「環境」という言葉を使う場合は後者の意味として使う場合が多く、人間の存在と密接な関係があるという考え方が主流をなしている。

つまり、「環境」は主体である人間とその外部システムである環境との相互関係によってとらえなければならない問題であり、社会学が基本的に人間と社会、主体と客体という関係性の原理の追求を究極的な目的としている以上「環境」の社会学的アプローチが必要不可欠である。

そこで、本稿の課題は社会学的視点から「環境」の概念規定を行い、次にシステム分析の観点から「環境」を分析することである。

最後に既成概念の問題点を整理すると同時に、いささか私論ではあるが、その解決方法としてのシュミレーションモデル、「動態的環境」について若干述べてみたい。

一 「環境」の概念規定

環境を広義的にとらえるならば「主体にとって社会関係自体がその環境である」「外部から影響を与える一切の力」「人間をとりまき、その生活に影響を与えるすべての条件」というように、単に外部システムとして、いわば、フィジカルに規定、制御関係におかれるものとして考えられる。しかし、環境が人間の存在によって、または、人間が認知することによってはじめて環境としての存在を認められ、同時に、人間がいかにしても環境から解放されることはありえず、実は環境をふまえて意味なものをとりだし創造的に生きている以上、環境を内部システム（主体）と外部システム（客体）の相互関係の中に位置づける必要がある。つまり、それが「認知的環境」と考えられるもので、それは人間の意識構

造の中にとりこまれていた様式として規定される。すなわち、これは意識構造面からベクトル化してとらえられるものであり、従来の社会関係のベクトルとのクロスシステムとして考えられるものが、新たに規定される広義的な環境になる。⁽⁶⁾

そこで「認知的環境」について検討、規定を行うが、端的にこれを示すならば「客観的環境（人間を取りまいているすべての外的諸条件）」の中から有意義な諸条件を取り出し、それらとの間に関係のシステムをつくりあげたもの」となる。

しかし、ここで問題とされる「認知」とは、さらに「物化認知」と「内面化認知」とに大別することができる。「物化認知」とは「モノ」として、外的条件として、したがって主体にとって対象化されたところの利用価値として認知される一方の極であり、「内面化認知」とは主体の生活意識のウチに入りこんで、その精神構造に内面化され、したがって何らかの程度はあれ、主体の判断と行為のエートスに消化されるような他方の極をさす。つまるところ、このように認知された環境が主体と客体の間に相互関係、相互依存を保ちながら、それぞれに影響を及ぼしあって存在していると考えられる。⁽⁸⁾

このような「認知的環境」における重要な視点は、それが内部システム（主体）と外部システム（客体）の間であれ、

二 「環境」と社会システム論

上位システムと下位システム、さらにはこれらのシステムが包摂しうる小さな対応事象においても、これらの間で行われるインプット・アウトプットの変換過程、すなわち「境界相互交換過程」である。これは、人間が外部システムから認知する環境（認知的環境）を創造的に活用し、また、フィードバックしていくという過程が、前述の「境界相互交換過程」となるわけである。つまり、こうした「インプット・アウト

プット」といった相互の働きかけから環境を定義するならば「準拠される特定のシステムの相対的に閉鎖、もしくは限定された境界の外からこのシステムを条件づける働きをすると同時に、この準拠システムの側から制御の作用を受け、その限りにおいて一定の秩序に服するものとして認識されうる事物や状態とその属性（およびそれらの集合体⁽⁹⁾）となる。

このように環境を単に、主体の外部システムとしてとらえるのではなく「認知」「インプット・アウトプット」という視点から規定、定義づけしてきたわけだが、究極的には、こうした視点は人間の存在、人間の価値観が大きくかわっていると云わざるをえない。つまり、「環境」という概念は人間が規定したもので、つねに人間を核としてとらえなければならぬ概念であると同時に、こうした位置づけによってはじめて意味をなすものであるといえる。

環境の社会学的分析にとって、システム分析の観点がいかに重要であるか、また、環境を社会システムとの関わりでとらえることの重要性について述べていきたいわけだが、まずはじめに社会学でとらえられてきた社会システム論について若干の整理と検討を行いたいと思う。

社会学に最初にシステム論を持ち込んだのはパレットだといわれている。その後、一五〇年代、六〇年代にはアメリカを中心に社会学の主流を占める理論となったわけだが、一般的に社会システム論は部分社会や集団をも対象としており、社会システムの最大でかつ、もっとも自己完結的なものが全体社会にあたると考えられる。この意味において、全体社会のみを対象とした社会有機体論とは異なった理論といえる。⁽¹⁰⁾

そこで、ここではパースンズの社会システム論について考える。パースンズの社会システム論の特徴は非歴史的な均衡理論という点である。かれのいう社会システムとは複数の行為者の社会的行為の体系であって、マクロな領域からミクロな領域まで多元的に設定しうる概念である。かれはこの領域をば、あたえられた均衡状態をみずから維持する傾向をもつ「境界維持の体系」としてとらえている。⁽¹¹⁾

ここでいう「均衡」の概念とは「社会体系が有する一定の構造内部諸過程が体系の外部および内部における投入―産出の境界相互交換を展開していく場合に、この投入―産出の割合は必ずしも一定しているとは限らず、何らかの変動がこの割合に生じていると考えられる。だが、この変動の効果が相対的に規模が小で時間的に短期である場合、『そのような相対的に小さい変動は体系の他の部分にそれが及ぼす影響の結果によって、反作用』を受け、結局もとの状態にまで回復される傾向がある。』この傾向を含んだ体系の状態」と規定されるわけだが、そこには静態的という限定はなく、「体系がおかれている一定の発展の線を維持するような均衡」、「動態的均衡」と呼ばれるものも含まれる。これは、体系要素の状態およびそれらの相互関係の状態に一定の水準を保持しつつ中心的な方向は失うことなく、しかも内部の相互行為の在り方に修正、変化を許しながら、成りたっていく状態を指している。そこでは、社会システムは環境（ここでいう環境とは⁽¹²⁾システムの部分ではないすべてのものをさす）に対してもつある境界線の内側で、この均衡を維持する傾向にあると考えられる。このように不均衡が他の部分の機能的調整行動により均衡へ復帰するという定式化は、環境と内部システムとの間で行われる「境界相互交換過程（インプット・アウトプット

ト変換過程）」において相互に影響しあって、それぞれが均衡の状態にいたるという状況と同じであると考えられる。

環境が内部システムに対して働きかけ、一定の秩序を保ち、相互に有益な部分で相互依存の関係が成り立つという状況は、まさに、パースンズのいうところの均衡の状態であるといえる。

さらに、この「境界相互交換過程」について環境との関わりでとらえるならば、社会システムと外部システムで行なわれるインプットとアウトプットの相互交換はインプットされるものはすべて当該システムにとって資源（社会資源）となり、それは、そのシステム内部で変換され他の体系にアウトプットされ、他のシステムにとって資源となる。こうして均衡の状態を維持するわけだが、これを人間と生態系との関係でとらえるならば、人間は環境からエネルギー・水・酸素（これが人間にとっての資源）などをインプットし生態的循環にともない環境へアウトプットしていく関係となる。

ただ、これがひとつの均衡状態を保ち、相互依存の中で存在する場合は問題はないが、現代においては人間の過度な環境への働きかけによって生まれてきた様々な問題（これが環境破壊、環境汚染である。）があり、人間が環境をも不均衡な状態にいたらしめた結果といえる。

最後に、今後「環境」を人間との関係性でとらえていく上で必要となってくる「動態的環境」について述べてみたい。

まず、この前提となるものは「環境の変化」という視点である。すなわち「環境」が社会的資源をインプットし、それを自らの内部で活用してアウトプットしていくという「境界相互交換過程」が、時間的経過の中で行われているという事実である。つまり、環境とはある時点でそれを受け入れる主体者が有益であると判断するものだけが、環境と規定できるのである。だからこそ、過去に環境としてとらえられたものでも、必ずしも現在においては環境であるとは限らないし、まして未来における環境も簡単に断定することはできない。つまり、環境も時間の経過とともに変化するのである。このような視点で環境をとらえるならば必然的に「動態的環境」というシュミレーションモデルを構築する必要性がでてくる。

しかし、これは環境を認知する主体者が人間である以上、人間の意識構造の変化、社会構造の変化、経済構造の変化など多元的な視点で環境をとらえる必要がある。

そこで、「動態的環境」を構築するにあたり、これを規定する指標を設定してみたい。これは①政治、②経済、③社会、④文化、⑤意識、といった指標である。これらの指標が時間的経過の一時点において交錯しあって「環境」を規定するの

である。

おわりに

本稿は、序論としての位置づけをしている。前述のごとく「環境」という言葉が多角的レビューで注目を集めている今日、再度、「環境」という概念を整理する必要があると考え、また、今後「環境」をとらえていくための方向性を見いだす目的をもっていった。

そこで、本稿の致達した結論というのは、端的に言えば「環境は動いている」ということである。また、その有効な分析方法として「動態的環境」の必要性である。

でも、こうした新たな「環境」の理論構築には、まだまだ、実証分析による裏づけが必要であると考えられる。

注

(1) A. Comte, Cours de philosophie, Tome III (一八元)

越智昇 「地域組織の日本的構成」(連見音彦、奥田道大編『地域社会論』一六〇 有斐閣双書、P 三〇)

(2) 越智昇 前掲書、P 三六

(3) 越智昇 前掲書、P 三八

- (4) 「現代社会用語集」
- (5) 越智昇 前掲書、P 三八
- (6) 越智昇 前掲書、P 三八
- (7) 「社会学小辞典」有斐閣双書 一九七 P 五〇
- (8) 越智昇 前掲書、P 三八
- (9) 新睦人 「生活環境破壊とは何か―環境社会学への研究法序論―」 日本社会学会『社会学評論』二〇六号 一九七 P 二四
- (10) 『現代社会学辞典』有信堂高文社 一九四 P 三
- (11) 塩原勉、松原治郎、大橋幸編 「社会学の基礎知識」 有斐閣ブックス 一九六、P 四七
- (12) 新睦人 「パーソンズ社会体系論の再規定Ⅱ」 奈良女子大学文学部研究年報第二号 一九六、P 77-8
- (13) Walter Buckley "Sociology and Modern Systems Theory" Prentice-Hall Englewood Cliffs: New Jersey W・バックレイ著、新睦人、中野秀一郎訳「一般社会システム論」 誠信書房 一九〇 P 三〇